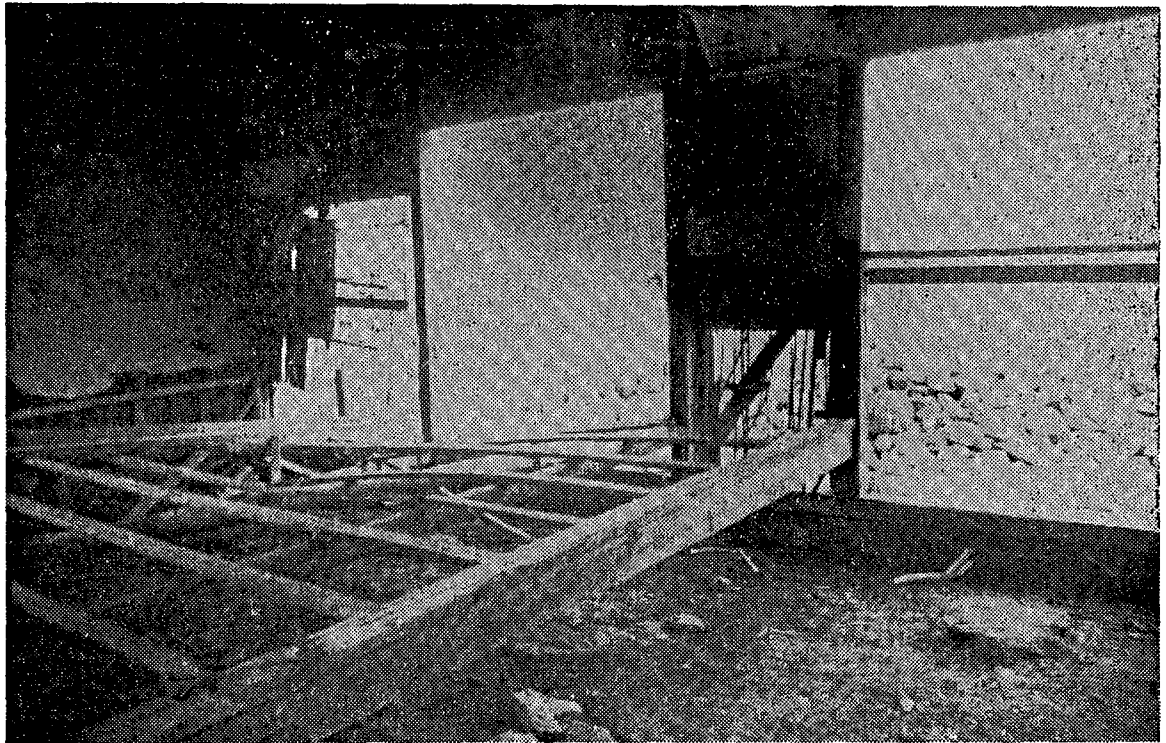


第六二号昭和卅六年十月十五日発行  
毎月十五日一回発行 一部 十円  
昭和卅二年十月十八日 第三種郵便物認可

# 拓水

十月



(第二室戸台風による生々しい傷跡)

兵庫県漁業協同組合連合会  
財団法人 兵庫県水産業改良普及協会

漁獲よりも大切な目標

付かなかったものであろう。

代用燃料を使うため機関の不調は免れない。ある朝出港準備にかかったが、本船の機関が一寸した故障で午前中修理せねばならぬという。午後になってようやく漁場に急いだがすでに満船した運搬船が続々と入港して来る。二時間近くも走ったが漁船は見えない。もはや一日の三分の二は終っている。船足がもう少し出ないものかと気は焦るがどうにもならない。折角の好天気を惜しいものだ。せめて夕方までに漁場に着いて二、三十トンでもよい、とらせてくれればよいがと祈る気持である。

やがてまだ漁場も遠いと思われる頃であるが、かもの大群によって魚群を見つけることができた。恐らくこのあたりは他船がすべて夜明け前の暗いうちに通過したので、魚群に気

「総員配置に着け！」全乗員は緊張した。魚群は完全に網の中に収められた。何んという運の悪い日、先刻までくさっていた気分が一ぺんにふつとんだのは私だけでなく全員か

け声もはづんで大群も忽ち締めつけられた。大漁旗のはためくまわりをかもめまでが熱狂して啼き交わしながら舞っている。多過ぎず、少な過ぎず、ちょうど手頃の大群を、らくらくと運搬船三隻に満載した。軽く二百屯というところだ。まるで道ばたで札束でも拾うように、いとも手軽く拾いものをした感じである。運搬船もなくなったから、もう漁場には用はない。一番あとから出て行って最先頭に入港してきた。しかも数百統のうち最高の漁とききた。こんな愉快なことがあるから、時には飯の二、三度ぐらい食べぬぐらいの心労

をするイヤな漁労長稼業も、やめられぬというわけだ。

翌日は本社から、「大漁を祝す、一層のご健闘を祈る、重役一同」という電報が私宛に舞いこんだ。ウツリヨウ島あたりをうろついで、お叱りを受けた当時の不名誉をようやく挽回できたというものだ。

昼間の成績が悪かったので、いろいろ考えて眠れぬままに夜半の空模様を眺めてみると、薄くもりで無風ヒキ張り(夜間作業)に持ってこいの天気だ。船頭を呼んで、惜しい夜だがなあ、と持ちかけて見た。すると案外のり気だ

「出ましよう、いい魚がおりますから」というので早速出動した。予定の漁場に着くと早くも大群に出くわした。それも白くなつて海面下を游いでいるのを見つける前に、海上に夕立ちのような音を立てて、猛烈なにぎわいを見せており、機関の音さえかき消されるほどにまで、船の周囲をつつんでいる。昼間ならば一応敬遠するほどの広さと深さをもつ魚群であったに違いない。投網を急ぎすぎたようだ。岩綱のワイヤーを三分の一も巻かぬうちに、あばは全部沈んでしまい、照明の下、船のまわりは魚の泡で真白になっている。

目次

漁業今昔  
いわしの巻 (18)  
平岡安民……………1

漁協婦人部活動状況の概要  
……………3

スルメイカの習性と漁業(一)  
日水研香住支所  
浜部 基次……………4

昭和三十六年六月の  
海面漁業漁獲量の概要  
農林省兵庫統計調査事務所 8

船は右舷に三十度以上も傾いて、ワイローラーを直ちにストップして、も巨鯨のそれよりも更に大きな力で、船を引っくり返さんばかりに、グイグイ底へ網を引っぱり込む、いわしの力は恐るべきものだ。私もどう処置すべきかわからぬ。全員ただ口あんぐりで、あきれはてた表情で成り行きを見ているほかはない。

やがてあばは、もう浮くか、もう浮くかと思つめる。前面には浮かず、左舷の思いもよらぬ所へ、一とまたまりになつて、ポカリと浮き上がった。網をかぶつた魚群が船の底を逃げてしまつたわけである。幸いに無風のなぎであつたからよかつたものの風波があつたら、どうしようもなかつたに違いない。この引っくり返えされねじりまわされた網を八時間もかかつて朝日が高くなる頃までによやく船に引き上げた。この破れ網のしわの中に残っていたいわしが五十トンばかりもあつたのはこれも意外であつた。この失敗で、しかし夜間作業に対する魅力が強めた。他船のとらぬ魚をとる、この味は忘れられない。時々天候を見てはこれをやるようになり、それで更に他船を引きはなす漁獲高となつた。

どの船でも、それを考えてはいるのだが、夕方遅くなつて投網してさえず不平が叫ばれるような船内の空気ではそれが実行できぬのである。全員一致した体制と、技術面におけるチームワークがすぐれていないと、ともすれば夜間作業で事故や怪我人を出すようなことがある。私が初めて巾着船にのつた時のような幹部と平漁夫との反目というものが人種的な感情によるものであるならば、半島人だけで乗り組んでいる船はうまく行つておらぬ。日本人だけでやつている船が必ずしもうまく行かぬのと同様である。問題は人種にあるのではなく、お互いの考え方と行動にある。この単純素朴の半島人を相手とするとき、日本人よりも遙かに役し易く自分の懐の中へ入れてしまふことはそう困難ではない筈だ。

これが私の信念であつた。私の夢はM先生の唱えるユートピアを朝鮮の地で作り上げようということであつた。もちろん古いことであつたけれども、入道雲よりも高く野放図に大きな夢を描いて、日向の村からの同志も加わつて「第二の村をつくらう」というのがその当時の鮮の第一歩であつた。その白銀に輝

く高い入道雲も、いつしか冷たい世の秋風にくづれ去つてしまつたが、その精神ばかりは大切に胸にいだいていたのである。そういう理想郷をきづくにしても、一隻の船で働くにしても、日本人よりはよい相手であるという解釈と、そういう相手と手をとるに合つて融和と信頼とを深めて行けば必ず何事もうまく行くという信念がそれであつた。

この小さな漁船の中の生活をとおして、私はその信念にたいする実証をつきとめたように思つた。第三大漁丸は迎日漁業の三船団のうち最も好成績で、他の二統を合わせたよりも以上の漁獲を上げた。この成果は全員一致結束して、雇われ人根性を出すような者がなかつたことに原因がある。鉄拳と恫喝とで漁夫を駆使してきた漁労長が、漁期の終りに解散の日になると、どこかへ姿を消して漁夫の前に現われぬというのが普通である。報復を恐れてのことらしい。そんな間柄でどうして成績が上がるだろう。

後年終戦直前の朝鮮海峡を越えて内地航海をしようとした時、日頃いかに親密にしていた内地人たちも、敵艦跳梁の魔の海で、毎日のように船が沈められていた際であるから

尻ごみして誰も乗つてくれる人がない。この時、以前私の船の船長をしていた男が、「いくら危険でもあんたが行かれるからには、ついて行きます。ナニニ人間一度は死ぬんです」と見えを切つて航海に加わつてくれた。その勇気と情義とは、打算だけで動く一部の日本人であつたら到底理解できぬ所だろう。

もちろん我々が在鮮中、植民地における支配者といつた優越感に基く独善や圧制を敢てしたことが、なかつたとはいえない。しかしそのような非人間性、不合理性は、どこの国の内部にだつて、権力や財力を背景としての横暴、酷使または誅求となつて現われているので、おどろくに足らない。

日本の植民地政策と、これにつながる日本人がすべて侵略的で、残虐であつたように、勝ちほこつた外人共がきめつけると、その通りにちがいがいけませんと、卑屈に頭を下げる人が多いいけれども、決してそんなものではない。少なくともわれわれ庶民はあくまで平和に仲よく暮らしていた。韓国の指導者のうちのトンガラがた少数の連中が、カタキ呼ばわりをするのを時々聞くけれども、それは政治的な意図があつて

### 漁協婦人部活動状況の概要

#### 婦人部名 月 日 実施事業の内容

|      |     |                |
|------|-----|----------------|
| 津居山港 | 九、五 | 日用品定期販売        |
| 柴山港  | 二一  | 京都府漁協連役員と懇談会   |
| 香住町  | 九   | 福島県婦人グループ技術交流  |
| 余部   | 二〇  | 料理解習会          |
| 三尾   | 一   | 京都府漁協連役員と懇談会   |
| 三尾   | 七   | 河川の清掃          |
| 三尾   | 二一  | 河川の清掃          |
| 浜坂   | 四   | 河川及び便所の清掃      |
| 諸寄   | 一一  | 役員会            |
| 諸寄   | 一一  | 浜そうじ。月例特価販売    |
| 諸寄   | 二二  | 福島県婦人グループ技術交流  |
| 諸寄   | 五   | 定例販売。教育に関する講話会 |
| 諸寄   | 一五  | 定例販売           |
| 諸寄   | 二五  | 定例販売           |
| 居組   | 一〇  | 福島県婦人グループ技術交流  |

のことで国民全体の感情とは別である。韓国は遂に赤の他人である、国交は容易に望むべくもない。など、説くわれわれが李ライン内外で毎日操業しているが、彼我の船が出逢えば手を振って「オーイ」と呼びかわすのが常であるし、船を接舷して「パンチヤン（おかず）を下ささい」

「解散の日は漁夫の一人々々が別れを惜しみ、肩を叩き手を握って「来年も来いよ」「生きとつたら間違なくこの船に

来ます」  
こう云って別れたが迎日漁業は資材難やら労力不足の大東亜戦下の巾着網の経営に見切りをつけ、明年は廃業と決定した。  
私は三たび浪人となった。すると元山の佐々木さんから迎日漁業宛に「御社では三統廃業の趣、ついては三名の漁労長のうち一名を当方へ雇い入れたし、ご紹介をたのむ」という申し入れがあった。川瀬部長はこの話しを伝えてくれて、

「巾着組合長であることはとも角箸と親方は太いがよいというのが本当なら船主として不足がないですよ。うちのよう貧乏会社とちがつて資材などの潤沢さは大したものです。あんたが十分腕をふるえる船だと思えますよ」無論どんな破れ会社にだって拾い上げてもらわねばならぬ私であったから二つ返事で承諾したことはいうまでもない。

炬口 二、九、  
グループ活動（洋裁講習会）

洲本 一七、二九、  
第一八号台風による被害整理（役員会）

飯屋 七、一〇、二四、二九、三〇、  
グループ活動（あみもの講習会）

育波浦 一、二、  
グループ活動（あみもの講習会）

三地区において座談会「今後の婦人部活動のあり方について」

グループ活動（家庭教育のためにローマ字をおぼえよう）

地区別活動（毎日の食事を工夫しよう）

郡家浦 八、一五、  
日用品の販売

沼島 一、  
内職の講習会

# スルメイカの習性と漁業(二)

## 日本海区水産研究所香住支所

農林技官 浜部基次

### (3) スルメイカ漁場の構成要因

スルメイカの漁場の構成に大きな意義をもつ対馬暖流は、本州の北西岸を洗いながら北流し、日本の北東部で流路が二つに分かれ、一つは津軽海峡を経て太平洋に流出し、他はそのまま北上して北海道西岸を洗う。

太平洋に抜ける分岐が親潮と接触するのは当然で、親潮に押されて併行して南下する。

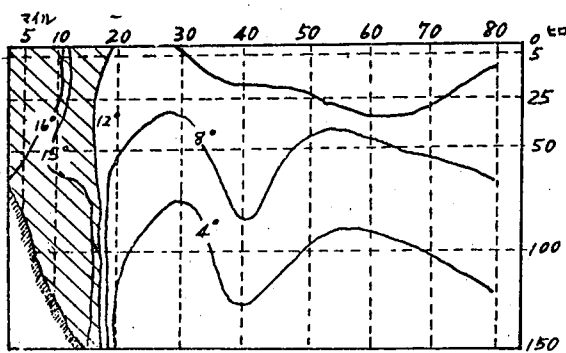
岩手県沿岸漁場で漁場の構成に意義をもつのは、親潮に押し込まれる流れであって、夏季対馬暖流が強勢な時には、この流れが沖合の親潮の上まで拡がり、一方冬季親潮が優勢な時には、暖流は狭い帯となつて岸に押しつけられ、スルメイカの群にこの二つの海流が大きな作用を及ぼしている。

大正八年十月に陸岸から五〜一〇

マイルで異常な好漁が岩手県下であったが、その時岩手県の試験船が岸から八〇マイルまでの定線で海洋観測をした結果は第十一図のとおりであった。

この図から判るように岸近くに二〜一六.Cの暖かい水塊がみられ

第11図 岩手県沖の水溫垂直分布図



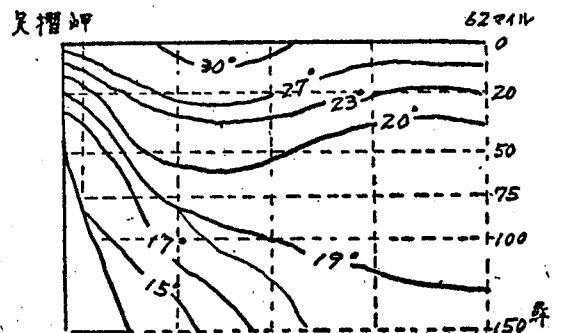
るが、これがスルメイカの棲む対馬暖流の南下流を示しており、沖合に

ある四〜八.Cの大きな水塊は親潮である。親潮の低い水温はスルメイカの棲息に不適當で通常秋に勢力を増してくる親潮寒流によって、暖かい対馬暖流分岐が岸から一〇〜二〇マイルの狭いしかも垂直的には深い帯のように圧迫されたためそこで好漁がみられたのである。即ちスルメイカは第十一図のような海況では、イカが棲んでいる水と一縮に、狭い帯状の流れの中に密集して運び込まれ、上から下まで通温であるため毎日底から表面へ、表面から底へと垂直に移動する行動を容易に行なうことができるため密集して狭い帯の部分に集められることが好漁の原因となつた実例である。

また暖流勢力の強い時は親潮寒流の上層まで拡がるため、その水平的な拡りの中に分散して発見されるためその漁獲もみるべきものがないのである。

一方黒潮暖流そのものも高温すぎため、スルメイカの棲息に不適當で、九州の南西岸、四国の南岸などではスルメイカが獲れない。しかし、このような地方でも岸近くの底層に一〇〜一七.Cの水塊があるとこころならどこでもある程度の好漁がある。

第12図 高知県沖の水溫垂直分布図

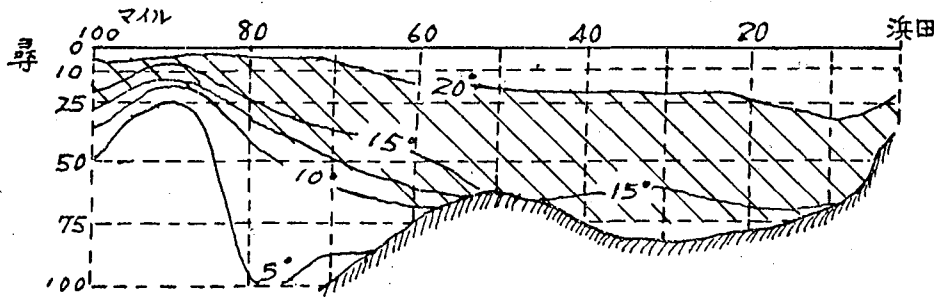


高知県でスルメイカの好漁があつた時の海水温の垂直分布をみると第十二図のとおりで、岸近くの海底線と平行に走っているスルメイカの適温水塊があり、この水塊は水温の高い黒潮水塊によって急激に急傾斜をもつて海岸におしつけられて生じたと考えられる。

また日本海では大正八年八月ごろ島根県沿岸でスルメイカの好漁がみられた。この時の海況は第十三図に示すとおり、適当な深さのところスルメイカの生活に好都合な一〇〜一七.Cの水塊があることがわかる。

この観測結果をみると、スルメイカの生活に最も適した水温をもつた

### 第13図 島根県沖の水溫垂直分布圖



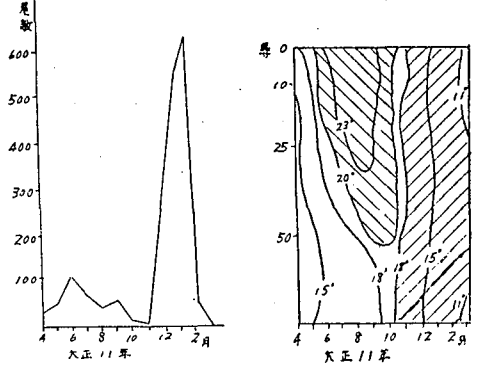
対馬暖流水が、日本海の冷たい底層水塊によって、沿岸に圧迫されているようにみうけられる。  
 これまでの実例から、スルメイカはまず水温一〇〜一七。Cの水塊に生態的に一番よい条件が得られるように、そこに集まっている。そして対

馬暖流の大きな水塊がスルメイカ漁業にとって最も好適であるのは主として対馬暖流が五〇〜一〇〇尋の深さにこの好ましい水温を有することによるものとみなされており、つぎのように要約することができる。  
**イ** 日本の近海でスルメイカは全体として一定の水温の沿岸水の深部に接んでいる。日本海ではスルメイカは厚く広く分布しており、そのもつとも濃密な分布は大体対馬海流の範囲と一致する。他方、太平洋では親潮や黒潮のような大海流に圧迫されるためにスルメイカの分布は通常大洋の淵の深い部分に限定される。

**ロ** スルメイカは沿岸水に棲むが、それは主として沿岸水が適当な深さ五〇〜一〇〇尋に一〇〜一七。Cの水温を有するためで、この水温はスルメイカの生活状態に最も適当な条件となっている。  
 以上太平洋側と日本海側の海況すなわちスルメイカのとれる海の状態を大づかみにみたわけですが、それでは西南日本海の島根県隠岐島とか、沿岸部では兵庫県但馬のイカ漁は部分的にみてどのような海の状態のときにイカが良く獲れるかを検討した結果、次のような条件下に好漁

が見られた。

第14図 隠岐島近海における漁獲定尺の漁獲量と水温分布の図



**漁 (漁場) の条件**  
**a** スルメイカの成体の生活適温は一五。Cを中心として二一。C〜一七。Cの範囲にあるが、スルメイカ群がおしよせてくるのには海域の五〇尋層に一五。Cの水塊が存在することが必要である。

**b** 大漁は海域が一五。Cを中心とする適温によって上から下まで等温度になるとともに、その前後に高温か低温の水塊が大きくひろがっていたとか、または海域が沖合から高温または低温の水塊で急激に圧迫される場合に多く、第十三図に示すとおり

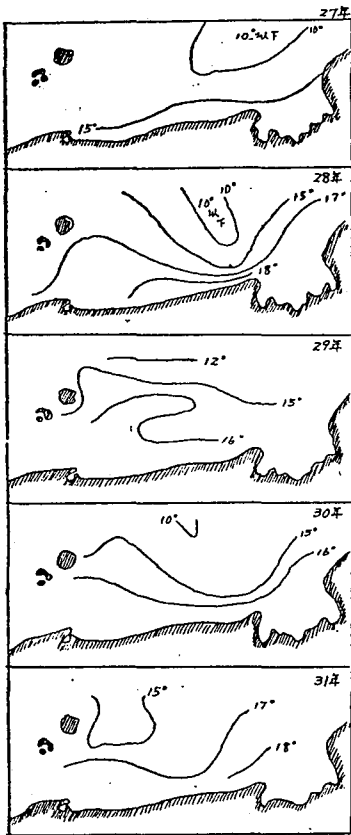
第15図 隠岐島近海における冬季75m層水温分布の図



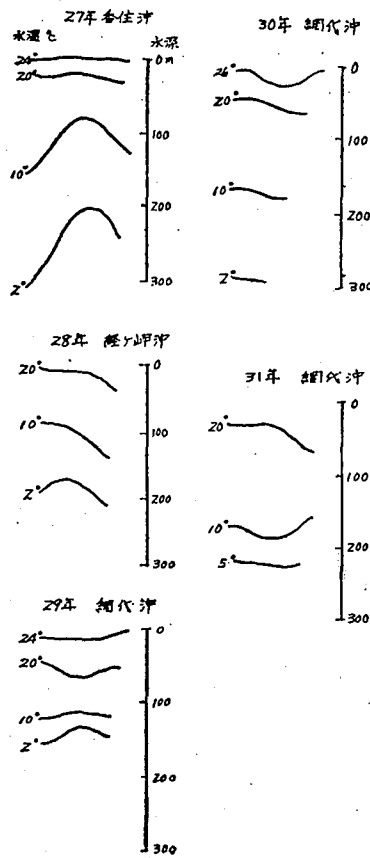
である。

最近の研究では隠岐島近海の冬イカ漁場は、大体スルメイカの遊泳層である一〇〇m前後の深度に第十五図に示すようなイカの適水温があり沖合の冷水塊によって東北方から圧迫され適水温の水塊が東方から隠岐島に向って集中されてくる時が、秋、冬の漁期のはじめに相当しこの水塊に含まれたイカが沿岸部に濃い群を作るようである。  
 この上に、冬季の北西季節風が北西岸又は北岸に、吹送流による急潮を生じ、列島の東南側が季節風に対する一種のエアポケットとなり、この海域に沿岸反流の緩い環流ができ、ここに急潮をきらうイカが「溜る」ため西日本海有数のスルメイカ漁場が形成されるのである。  
 一方但馬を含む山陰東部の「夏イカ」漁場の海況は第十六図に示すように京都、鳥取、兵庫の

第15図A  
昭和7月の山陰東部沖100層の  
水温水平分布図



第15図B  
昭和7月山陰東部沖の水温垂直分布図



三府県で好漁であった昭和二十七年〜二十九年までは盛漁期に冷水が発達して、その影響が沿岸近くまでおよんだ年であり、不漁であった昭和三十年〜三十一年は暖流が深層にまで達し、冷水は沖合いに退却して、冷水の湧昇流も明瞭にみられない年であるということが出来る。

本州沿岸を北海道から九州まで大

#### (4) スルメイカ漁と灯火の関係について

以上の例から適水塊が冷水塊または高温水塊に圧迫集約される場合にほとんど例外なく好漁がみられ漁場が形成されていることがわかる。

洞游するスルメイカの洞游径路の西方関門といえる隠岐島で、隠岐以東北海道までと、隠岐以西対馬までの各種漁法によるスルメイカの採れかたを見較べると、東と西でかなり相異なる点がある。

北海道では、鈴蘭灯の大型イカツケ船が近年飛躍的に生産を増大し、合理的で高能率な集漁法は、次第に西方に普及し、兵庫県津居山に、「鈴蘭熱」とでもいったらよいような改良意欲を燃えたたせている。昨年「冬イカ」時分に隠岐浦郷の漁民と津居山の出嫁希望漁民とが、漁協で一本釣の懇談会を持った時、青森、岩手のイカツケ視察結果が披露され鈴蘭釣によるスルメイカ漁獲の飛躍的増大は疑問の余地がないと確信している模様であった。処が、浦郷の漁民から一斉に「NO!」の発言があった。スルメイカは強い趨光性をもち、集魚灯の光力の増減に比例して漁獲高が増減するということは古くから観察報告されており、隠岐周海でも、同一漁場で隣接してスルメイカの本釣を操業する場合、発電機4〜5キロを装備した漁船と、蓄電池8 volt 20wの漁船とが競合すれば、明らかにバッテリー船は発電機船にイカを吸い取られて漁獲皆無の

状態となる。

イカの索餌活動が活潑な時には、確かにそのとおりであるが、沈帯している時には、強力な集魚灯をもつてきて、夜を徹して焚いても、現にその漁場にイカ、しかも空胃のものが群として存在し、浦郷湾の内海イカは定置網に数千貫の入網がある時でも、イカが集魚灯につかず、釣れもしない。

実は、浦郷でスルメイカの本釣漁民から提出された難問は、数力年にわたって近海スルメイカ一本釣を窮地に追い込んでいる餌付かぬイカの原因と対策であった。

餌付かぬイカは、同時に灯付かぬイカであり、定説の強い趨光性が反対の現象として現われる極めて例外的な場合のことである。

隠岐近海では、昭和二十五年を頂点として次第にスルメイカの漁獲が減じ、昨年は近年最悪の漁況で、一本釣の対象となる接岸帯泳群の量が減退する一方、イカそのものの灯付き餌付きの不良が複合して、浦郷の一本釣漁民がスルメイカ釣に情熱を示さなくなっていたやさきであった。

昭和三十一年は、問題の灯付き餌付の悪さに対する幾つかの試みが浦



郷に進められ、今までよりもっと深刻な悲観論が漁民の間に支配的となった。

水産の生産活動を単的に表現するものは「魚佃」である。徹底的な「秋サバ」の不漁に何十統という機船巾着が赤字を抱えて、境、浜田、等の港に溢れている時、北海道の不漁が影響して三貫入一箱千円の高価を呼んだスルメイカが窮余の目標として生産対象にならぬ筈がない。魚群探索の行動半径の広さと集魚灯火光の強烈さは、北海のイカツケ船と西日本海の機船巾着網船と比較してそれほどへだたりがあるとは考えられない。また、巾着漁業の近代性は、鈴蘭灯原理の応用能力を欠くようなことではとても運営されるものでないと見ていたところ、その所信を裏付けるように、浦郷漁協の小型機船巾着が、スルメイカの試験操業をしたし、それと前後して発電機漁船もほとんど全船操業して、灯付き餌付きの悪さを徹底的に再確認するという結果に終わった。

問題の重大さに気付いてから、隠岐島周辺のスルメイカ一本釣や定置網、他に広い海域を操業する巾着網と底曳網に注意し、それらに混獲される状態を根気よく聴き取っておい

たその聴き取りから総括的にいえるうなのは凡そ次のようなことだった。

北方海域では、外套長20~23cm程度の若いイカが多く鈴蘭灯に浮魚状態で灯付くが、隠岐近海では巾着灯船の灯付きが悪く、意外なほど巾着に混獲されていない。そして更に隠岐以西では、底曳網に数百貫の漁獲がみられ、西方対馬へ接近するほど大量になるという風で、どちらかというとき底魚に近い性質のものとして漁獲されている。昭和二十八年十月から二十九年二月まで、兵庫県対馬出漁船団での経験では、名角氏は「電池釣りよりも在来のトンボ釣りの方が良成績を収めた。長崎県の漁船は、 $\omega$ ノ $\sigma$ の集魚灯を煌々と輝いてイカ釣りを行なっていた。その成績も決して上々というのでなかったが、集魚灯を持たずに単にトンボだけで釣る場合よりは成績は良好であった」としている。この一章からすべての結論を抽出することは無理であるが、対馬周辺では発電機集魚灯をもっている方が、まあ良いというほどのことはいえそうだし、対馬でも隠岐でも3~5km程度の集魚灯では、段違いの漁獲差が出るようにもみえない。

隠岐を境界として、以東での強い趨光性があり、以西では低減し、ある時には完全に趨光性がなくなるといふことがあられるようにみえる。

この場合、スルメイカが後天的に光刺激に対して逃避の条件反射を起すというふうな考えられるし、イカそのものの交接、産卵等の生殖活動に伴なう生理変化が、反応のしかたを変化させておるといふふうにも考えられる。事実十二月、一月を境として、隠岐周海では雄イカの *Spent* 現象と。雌イカの熟卵抱懐が急速に進むらしいことも近年の魚体測定結果からかなり確かと考えられるようになった。

それらをポツリポツリ総合してみると、どうも隠岐島周辺で、南下スルメスカ群が交接期を終って産卵期に入り、群の性質が変質して集魚灯に灯付かず餌付かずという厄介な状態になるということが確かのように思える。

イカの群団は、種々の発育段階のものを含んでいるから、隠岐以西でも、集魚灯の効果がないということはある得ないし、また効果がある限り光力、光達距離は強く広く深い方がよいのはあたりまえであるが、鈴蘭釣りを導入するだけでは、北方で

の効果が決定的であるほどに隠岐島以西で効果絶大であるとはいいい切れぬ未知の要素を含んでいる。

集魚灯の効果は、根本的にはその時その漁場に存在する魚群の多寡によつて、かなりいろいろ異なる評価を生むから、北方の群団の濃密さと隠岐周海、以西等の魚群の濃密さの差も当然問題となってくるが、スルメイカの基本的性質とされる強い趨光性が、その生活史のある時期に変化するらしいという考えかたをも少し掘り下げてみたい。

案外北海道から朝鮮海峡附近まで鈴蘭灯のイカツケ船を漂流させてみたら趨光性について面白い結果が出るかもしれないと思っている。





# 七月の総漁量は七、七五七トン、「いわし」は 前年同月より三〇%減、内海の「たこ」は依然 豊漁

農林省兵庫統計調査事務所

昭和三十六年七月の海面漁業による兵庫県の漁獲量は七、七五七トンで前年同月より四九六トン(六%)の減少であった。このうち、他府県船による水揚げは三六トンを、京都、鳥取、島根、山口県の中着網、敷網、いか釣り船が日本海区に入港水揚げした。

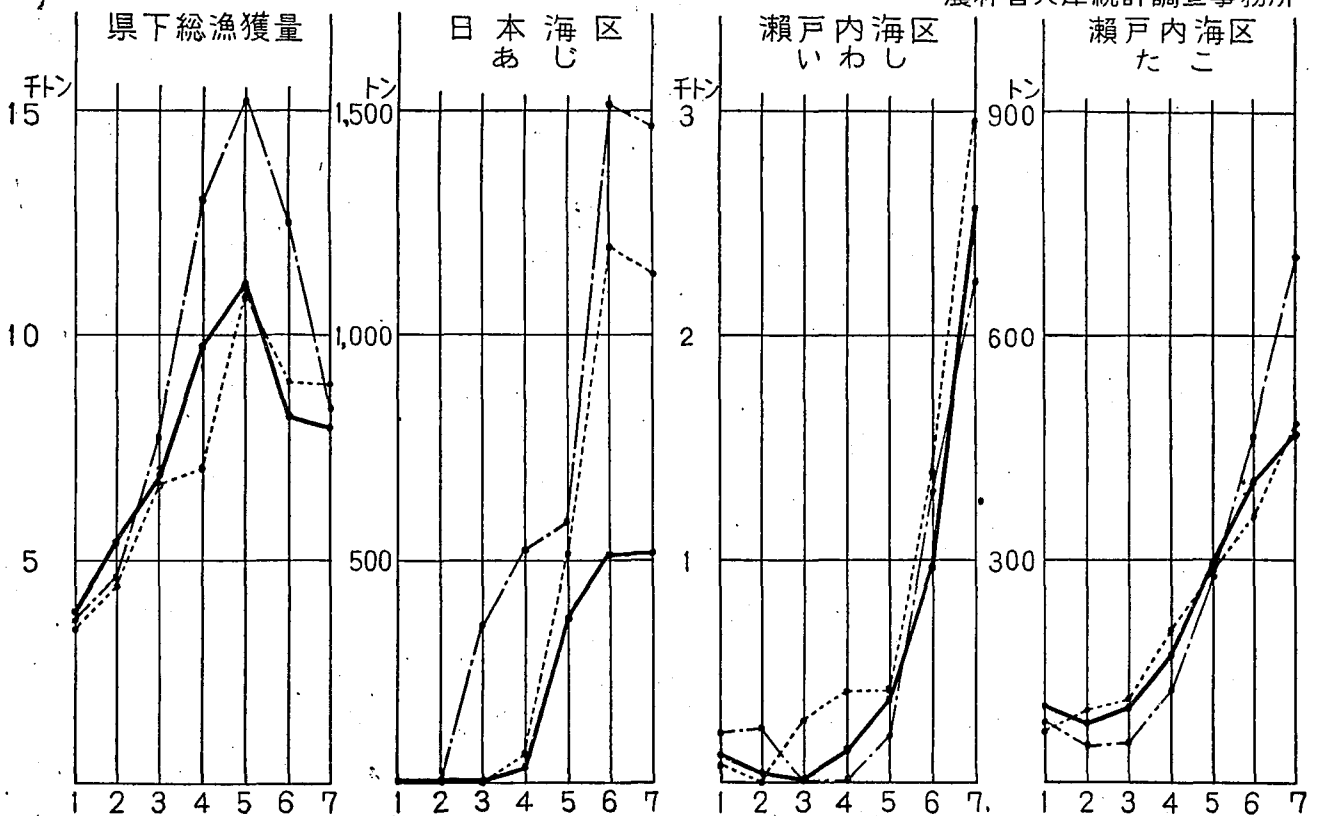
海区別には日本海区は二、九四〇トンで前年同月より九%増加したが、瀬戸内海区は四、八一六トン(摂津海区一、八九八トン、播磨海区一、二三七トン、淡路海区一、六八二トン)で前年同月より一三%減少した。また日本海区においては、「いわし」の漁獲は減少したが、「あじ」「するめいか」は前年同月より増加し、瀬戸内海区においては「かたくちいわし」の漁獲減が目立っていた。増加した主な魚種

「あじ」の漁獲量は一、七六九トン(日本海区一、四六三トン、瀬戸内海区三〇六トン)で前年同月より二九%増加した。ことに日本海区は「あじ」は前月に引き続き、きんちやく網、敷網の主要魚種となっており、きんちやく網二四〇トン、敷網一、二〇〇トンの水揚げをなし、過去五カ年の七月平均漁獲量の約三倍、前年同月にくらべても三一%の増獲であった。「まだい」の漁獲量は二六三トンで前年同月より七%増加していた。これは日本海区の漁獲増によるもので、瀬戸内海区においては前年同月とほぼ同じであったが、過去五カ年の七月平均漁獲量より約四〇%減少していた。「するめいか」の漁獲量は九八二トンで前年同月より二三%過去五カ年の七月平均漁獲量より二七%とそれぞれ増加した。「たこ」の漁獲量は七四七トン(日本海区一五五トン、瀬戸内海区七三二トン)で前年同月より四九%増加し、主漁場の瀬戸内海区においては、前年同月より四八%、過去五カ年の七月平均漁獲量より五五%とそれぞれ増加した。漁業別には小型底曳一四五トン、たこ釣二九〇トン、たこ壺二八二トンの漁獲増で各漁業ともそれぞれ増加し、ことに播磨灘東部(鹿の瀬)周辺における漁獲増が目立っていた。減少した主な魚種

「いわし」の漁獲量は二、四九九トンで前年同月より二八%減少した。海区別には日本海区は三〇八トン、「まいわし」二一七トン、「うるめいわし」一五五トン、「かたくちいわし」七六トン)で前年同月より三七%過去五カ年の七月平均漁獲量より四七%それぞれ減少した。瀬戸内海区における「かたくちいわし」の漁獲量は二、一九〇トン(摂津海区一、六二七トン、播磨海区二三三トン、淡路海区三三三トン)で前年同月より二七%、過去五カ年の七月平均漁獲量より一四%減少していた。漁業別には、きんちやく網で七七三トン、船曳網で一、四一五トンを水揚げし、前年同月より前者は八%後者は三三%それぞれ減少した。「えび」の漁獲量は五〇二トンで前年同月より三一%減少した。「えび類」のほとんどは小型底曳によって漁獲されるが、前年同月にくらべると、播磨海区においては一〇%の増加を示しているが摂津海区においては三〇%、淡路海区では三八%とそれぞれ減少した。

### 本年の月別漁獲量と前年および過去5カ年平均漁獲量との比較

—— 過去5カ年平均  
—— 本年  
- - - 前年  
農林省兵庫統計調査事務所



昭和36年7月の海面漁業漁獲量 (単位：トン)

| 海区<br>年次        | 県 総 計   |         |         |     | 日 本 海 区 |         |         |     | 瀬 戸 内 海 区 |         |         |     |
|-----------------|---------|---------|---------|-----|---------|---------|---------|-----|-----------|---------|---------|-----|
|                 | 36年     | 35年     | 増減量     | %   | 36年     | 35年     | 増減量     | %   | 36年       | 35年     | 増減量     | %   |
| 魚種              | 7,757.3 | 8,253.7 | △ 496.4 | 94  | 2,940.8 | 2,693.1 | 247.7   | 109 | 4,816.5   | 5,560.6 | △ 744.1 | 87  |
| 総 数             |         |         |         |     |         |         |         |     |           |         |         |     |
| い わ し           | 2,499.1 | 3,487.9 | △ 988.8 | 72  | 308.3   | 492.7   | △ 184.4 | 63  | 2,190.8   | 2,995.2 | △ 804.4 | 73  |
| あ じ             | 1,769.7 | 1,376.7 | 393.0   | 129 | 1,463.0 | 1,115.7 | 347.3   | 131 | 306.7     | 261.0   | 45.7    | 118 |
| さ ば             | 152.3   | 99.4    | △ 68.8  | 31  | 21.8    | 89.0    | △ 67.2  | 25  | 8.8       | 10.4    | △ 1.6   | 84  |
| ぶ り             | 24.4    | 5.7     | 18.7    | 429 | 2.3     | 2.2     | 0.1     | 108 | 22.1      | 3.5     | 18.6    | 628 |
| ひ ら め い         | 67.7    | 72.3    | △ 4.6   | 94  | 0.1     | 0.4     | △ 0.3   | 25  | 67.6      | 71.9    | △ 4.3   | 94  |
| え そ             | 27.7    | 53.8    | △ 26.1  | 52  | —       | —       | —       | —   | 27.7      | 53.8    | △ 26.1  | 52  |
| え い             | 11.0    | 1.2     | 9.8     | 958 | 0.1     | 0.1     | △ 0     | 96  | 10.9      | 1.1     | 9.8     | 999 |
| と び う お         | 7.7     | 8.2     | △ 0.5   | 94  | 7.7     | 8.2     | △ 0.5   | 94  | —         | —       | —       | —   |
| さ め             | 12.6    | 6.5     | 6.1     | 194 | —       | —       | —       | —   | 12.6      | 6.5     | 6.1     | 194 |
| は も             | 45.8    | 41.0    | 4.8     | 112 | —       | 0       | △ 0     | —   | 45.8      | 41.0    | 4.8     | 112 |
| ま だ い           | 26.8    | 25.1    | △ 1.7   | 107 | 5.1     | 3.4     | 1.7     | 151 | 21.7      | 21.7    | 0       | 100 |
| さ わ ら           | 0.8     | 6.0     | △ 5.2   | 14  | —       | —       | —       | —   | 0.8       | 6.0     | △ 5.2   | 14  |
| ぼ ら             | 24.4    | 20.8    | 3.6     | 117 | 0       | 0       | △ 0     | 50  | 24.4      | 20.8    | 3.6     | 117 |
| す ず き           | 23.4    | 23.1    | 0.3     | 101 | 0.5     | 0.6     | △ 0.1   | 81  | 22.9      | 22.5    | 0.4     | 102 |
| し い ら           | 8.5     | 6.8     | 1.7     | 124 | 8.5     | 6.8     | 1.7     | 124 | —         | —       | —       | —   |
| あ な ご           | 56.2    | 34.6    | 21.6    | 163 | —       | 0       | △ 0     | —   | 56.2      | 34.6    | 21.6    | 163 |
| そ の 他 の 魚       | 470.4   | 555.0   | △ 84.6  | 85  | 32.1    | 28.5    | 3.6     | 113 | 438.3     | 526.5   | △ 88.2  | 83  |
| (魚類計)           | 5,107.0 | 5,824.1 | △ 717.1 | 88  | 1,849.5 | 1,747.5 | 102.0   | 106 | 3,257.5   | 4,076.6 | △ 819.1 | 80  |
| 水 産 動 物         |         |         |         |     |         |         |         |     |           |         |         |     |
| す る め い か       | 982.7   | 801.5   | 181.2   | 123 | 982.7   | 801.5   | 181.2   | 123 | —         | —       | —       | —   |
| そ の 他 の か       | 119.1   | 196.8   | △ 77.7  | 61  | 82.6    | 128.7   | △ 46.1  | 64  | 36.5      | 68.1    | △ 31.6  | 54  |
| た こ             | 747.1   | 502.0   | 245.1   | 149 | 15.3    | 6.6     | 8.7     | 234 | 731.8     | 495.4   | 236.4   | 148 |
| え び             | 502.4   | 724.5   | △ 222.1 | 69  | —       | —       | —       | —   | 502.4     | 724.5   | △ 222.1 | 69  |
| か に             | 127.2   | 27.4    | 99.8    | 464 | —       | —       | —       | —   | 127.2     | 27.4    | 99.8    | 464 |
| な ま こ           | —       | —       | —       | —   | —       | —       | —       | —   | —         | —       | —       | —   |
| そ の 他 の 水 産 動 物 | 3.1     | —       | 3.1     | —   | —       | —       | —       | —   | 3.1       | —       | 3.1     | —   |
| (水産動物計)         | 2,481.5 | 2,252.3 | △ 229.2 | 110 | 1,080.6 | 936.8   | 143.8   | 115 | 1,400.9   | 1,315.5 | 85.4    | 106 |
| 貝 類             | 158.5   | 159.8   | △ 1.3   | 99  | 7.1     | 6.9     | 0.2     | 104 | 151.4     | 152.9   | △ 1.5   | 99  |
| 藻 類             | 10.2    | 17.5    | △ 7.3   | 58  | 3.6     | 1.9     | 1.7     | 191 | 6.6       | 15.6    | △ 9.0   | 42  |

(注) △は減 0は漁獲量50kg未満 (50kg以上は100kgに切上げ)